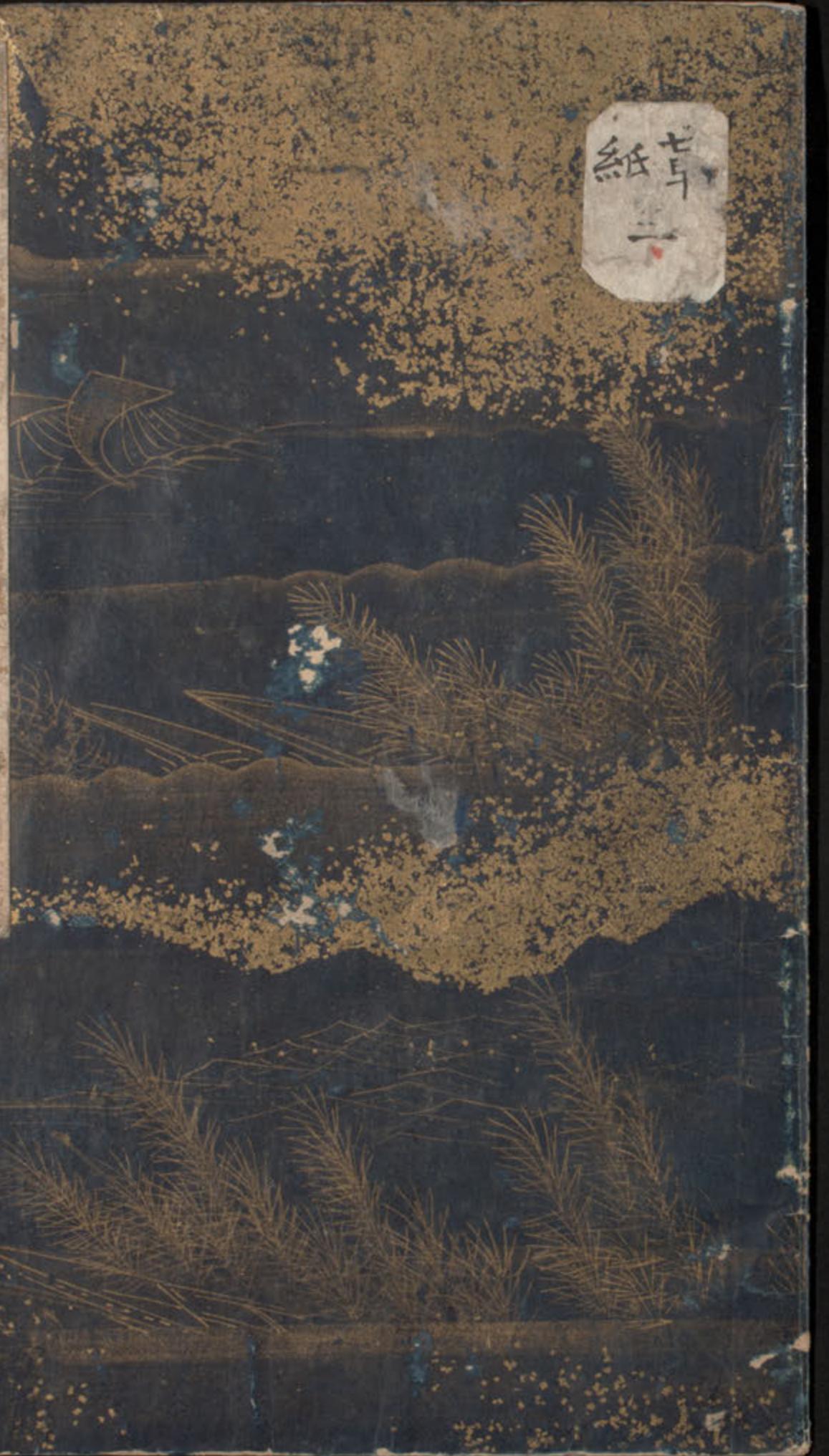
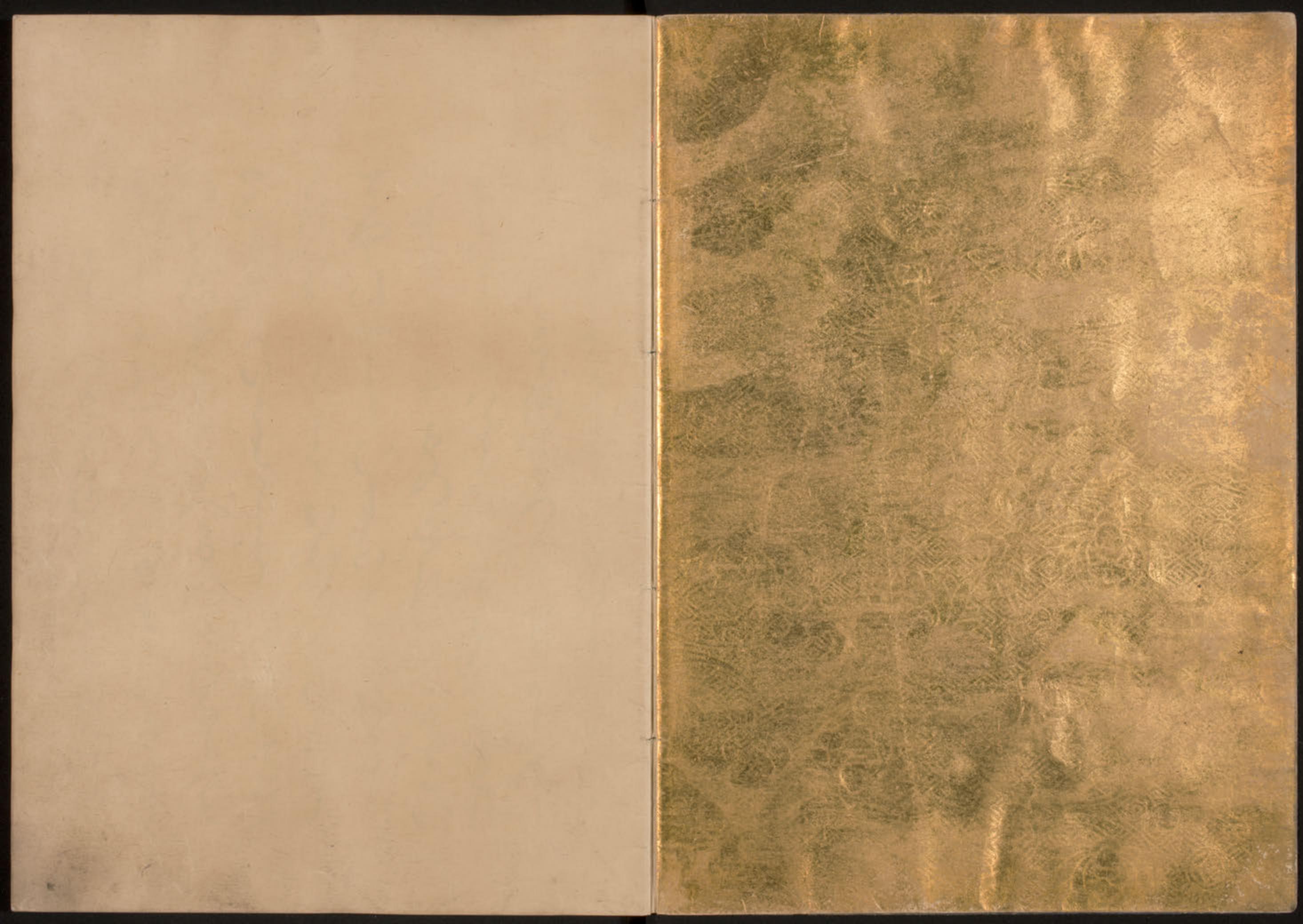


草紙







てのまゝとひきこゑすひ  
きくもまづりにつけば  
あひもまづりに自  
いはりをめどりか  
今へあらそひのまづり  
まづり、あまみのまづり  
てのまづりにせまつ  
す

久留はるくはひづ  
かえりんとせえのむち  
せれんへゆわゆ  
りうんへやううのすれ  
おもんくわりうのすれ  
てまよひくわひう  
ゆくはるくはひづ  
かえりんとせえのむち  
せれんへゆわゆ  
りうんへやううのすれ  
おもんくわりうのすれ  
てまよひくわひう

つまうつまう  
えのひのひのひ

蒙古文

印光

水の音をひいたるのちかくに見え

蒙古文

漢語辭（元）

て、おもての席に

蒙古語

卷之三

行國生人之名義  
行國

卷之三

種每叢半毫一斤，處此不乞人。

同檉緩樹枝頭中一葉子落地上

{ } { }

一人 指教圖白とし 織多抄の執  
柄必為一死に當らぬ様一人  
も見ゆ  
そ人 指教へかへらるんこれ  
をもよおゆせてひづれよる  
わらじへ刃林の中ちあとさ  
て下る、  
こゆうき 美乃夫人の泣きしも  
とを麻の泣きしりゆくすれど  
歌うてはく(小聲)いふよう  
それ  
力のまぐらとまじめに  
つむへひきだらう  
や  
れの声すらぬれどもかやれ  
りゆく(小聲)いふこと  
それうちもまく  
立候方候事

はあめ  
はならはるえむしも  
一すらの空音よつぐへやう  
いそぎひよくのへつと  
りき極  
ひまのもうへかひ字しゆる  
てひせひりうつ

傍書ひつと  
平易の人に津波を  
鴻の恒平之子く和列多武争  
傍く傍書かよ併うう又元亨  
釋書よ傍うう

もくづのくとへをく一のく

たゞのまじへるをく

わくわくくわくくわくくわく

わくわくくわくくわくくわく

もくまくくわくくわくくわく

わくわくくわくくわくくわく

もくまくくわくくわくくわく

とわくわくくわくくわくくわく

よ拂ううくと拂ううくと拂う

カニコキラリ  
カニコクラントナフハ  
賞ト易色いシテ

貢  
カシコク

カル  
易色

ゆえく  
もくく  
日本紀をよび各有芳降シマヤウ  
シナクタリ

文乃乃  
傳事多のひづれ  
やうやくのりうどし  
むくやまとくとうう草の

人の続 唐書 魏徵 肅太宗臨朝難曰

以銅為鑑可正衣冠以古為鑑可以興替以人為鑑可以明得失朕常  
保此三鑑內防已過今魏徵逝一鑑

亡矣

驚とくとくしりともうるくのあや  
ひま縫ユイカイともゆくは院のま中の  
トトとわ鶴タツのむちりやけん  
きりのとくとくたとくともうく  
とすとすとすれ

いすへのきつとへなぶ うら

くのえいとよき日本 とてそ延  
ゑ天層テンスケの帝テイとくとく  
まくまく ほのまくとくとく  
まくせん かくとくとく

がくとくとく かくのまくとく  
やくとくとくとく

お冠クラウともう九重クシマツの辭ハセ  
九重クシマツ 右坐相師シヤクシ補ヒへか一毛イモう  
火龍院 今會イムカ八十四代後アフタ院才三  
曾子様ソウジヤウ抄シヤウ一卷イチモンの抄シヤウ

もくやまのまくわ うくとくとく  
うくとくとくとく

又玉手すとまをじらすとま

アラ

あよいそし色こえよもく写  
きりとくもむのそうれぐ  
なれつもくとくえ病あよもく  
もてあくさくひまつひわうえ觀乃  
りきりせのくつとつしよめり  
ようくわくまくまくいふん  
きくへきくねくらみまくわじゆく  
トカクれまうとてもくもくま  
うきとくまくまくまくまく

れくまくまくにあてせよそやす  
くわくとくんじてりゆりく  
うきとくまく

シカ  
寂とくらひのう  
くちあくとくくのうす

いのそくまくとく

玉危無富

樹華無富あはく

うきとくまく  
はくまくまく

ふとくまくまくまくまく

もくらとことこれにやくらとこれ  
あるひのむへりまくらあらう  
ちくらん 風をあらわす

朝や

のそく

多くれ 風流とねくさう

たまごと人まくとまくまく  
えんとくさうむのえんと  
れんのあくとくとくとくとく

れんのあくとくとくとくとく

ほのせりとくようとくと佛のなう

こくふく

ほのせのす

は能むは能や能の

じりく能くありて合て能て能て能

よお向てありまやう能とのは

うこのうんうう能よおう能

くとくとくとく

石事よ能くもあらうのり能る

うきあくとくとくとくとくとくとく

あくとくとくとくとくとくとくとく

あはり 鶴巣のやのまへいへん  
配所八月はうるてやうんじゆもえ  
えぐく

石筆

さひのうめせにわくふき

後事ノ

う、そえぬ

あすとく

くかとゆふすのまくわう

ひづくにちより

やくえき

よりよひー

鶴巣中納主

西まへたとむを

孫人角去後嘗ての一男

配所

流罪た邊びんのゆで

我力八角ん

とま

救うさんわもすどりよひよきて

ううんと申させ八度を取とて元因

左官をあそびとみんととせ

うううううのわもすほおもととせ

うううううのわもすほおもととせ

天子の御代を承りて世をへぬるやうより  
アヘンの宝庫をもの御臺とぞ  
てはセレムルノモアトシテシル  
シトコトス御院アリヤシカツヒ  
ト仰クシニヤ

前中書主 中務通明、叔主通志也

子く詩文絶去人ヨシニシテ

九事主改下

伊通ヨシニシテ

元園たく官 有経也後ニ唐慶通  
に就き也

そく 雪の多く子原ツツイ常ハ重  
自嘗祖至ハセ病シテ得稱リテ常原ト  
多病也シテ 五改名后らの房シテ澄々志  
行云多り也のことをあくへ又清和天  
皇ハ不祖文シテ

也也ハ翁乃わざう

一よし後シテもろ

く夜原多葉シテ富也也之又幽天  
曾シテ一室既して十四代百七十五  
年帝王立シテもとあらやう

和菴太子

用明天皇へひそく平氏

至浦子子傳磨曰太子三回印陵  
勅墓工曰汝斬四路朕烹趣有二  
一者為令<sup>シカ</sup>大行<sup>シラ</sup>之煩<sup>シテ</sup>吾我  
孫為令<sup>シカ</sup>日本之<sup>シテ</sup>後又曰子孫不  
續<sup>シカ</sup>言云大名<sup>ルトカト</sup>孔子<sup>シテ</sup>後嗣若  
為石<sup>シカ</sup>矣若<sup>シテ</sup>釋迦<sup>シテ</sup>大聖弟子<sup>シテ</sup>  
焉<sup>シカ</sup>孔子<sup>シテ</sup>小賢弟子<sup>シテ</sup>

わざあ事の爲めにうそをつくるも承  
とのまうきまとんじゆううる  
うづくへりてゆのうれしもん

あまのとくさんへもうへる  
わざのとくさんへもうへる  
うりうへあやむけのうへ  
あらえうれす。打た志郎もあが  
ひめありと後輩玉川よしゆ  
さうもく又けりひづくらうもく  
くはくふくふくのせうとへ重  
ねよる事へえりわくう合の計  
初小わざのとくさんへるや知  
今くえ化節とまうふ慶元年

舍より出事とぞ知れてかくや

まくわんもあらば

毛野

わゆるをそのとく

とゆくのとく

とゆくのとく

とゆくのとく

とゆくのとく

遊絲<sup>ユラシ</sup>蛇<sup>ヘビ</sup>蠍<sup>ササニシキ</sup>鷲<sup>ヤマハシ</sup>馬<sup>マサニ</sup>陽<sup>ヨウ</sup>

とゆくのとく

ひじりよし

莊子多男子則多

懼富則多事壽則多辱是三者非

所以當述也

クのよる隊アシカにて 朝食貪名

利夕陽堂子孫

さうり りりすゑ

今もわまともじへむとふ

さゆくともわううきく

せとしきりふくわ

論語及其

老々血氣既衰戒之在得 又云老而

不記是為賊

せんのやまくもとの色缺よもも

もんのうへきうきうきうの白

ひとへうれきのうよもりく多富  
かそくらゆすしゆくらゆくら  
のりくらゆのゆくらゆくらゆく  
くまへ仙人のゆわへゆのゆくらゆ  
めくらゆくらゆくらゆくらゆくら  
めくらゆくらゆくらゆくらゆくら  
めくらゆくらゆくらゆくらゆくら  
めくらゆくらゆくらゆくらゆくら

くら

世乃の 亂記。飲食男女人之大歎有聲  
入滌聲羨色易憇久。白文文集古板

妖且老化為婦人顏色好見者十人  
八九迷惑似色迷久行若見其色迷久  
應也此彼真此彼化迷惑久

余の他人 えすやうぐまひ老和列

上郡人入深山，仙法食松葉，眼簾荔荔，一旦騰空，化爲白雲，僕婦人以足蹈流衣，其脛甚白，忽生深心，即時墮落。舊曰：昔媯女誓曰：我不跨一  
角仙，不出山果，然久未見白脣，而夢有以矣哉於戲！色之毀人也，不

慎子

和乃也  
所之也

セガラのタマシ  
人間の目

へもんへつりふとくへやいひう  
きけふふくわあふとももくれ  
よまきてしもあらまゆる人のうち  
とまくわくとくとくせのくらとくま  
りとれどめとめとめとめひく  
くのくくとめくくくくく  
りとれどめとめとめとめひく  
くのくくとめくくくくく

きくへく色とめくくくくく  
きくへく色とめくくくくく  
きくへく色とめくくくくく

きくへく色とめくくくくく

きくへく色とめくくくくく

きくへく色とめくくくくく

へきくわりくのくたくをくく  
くもくわくもくくくくくく  
くとくのくくくくくく  
くわくわくくくくくく  
くとくとくわくたくとくとくとく  
のくくくくくくくくくくくく  
いよくわくくくくくくくく

女詞

文選

衛右興於贊發光熹

電於牀輕

詩君子偕老篇莫復

如雲不肩鬢也

イナキコニト

まの えひまとひりとみるく形勢

とあれともぞう

うちも 常住御のまへたちも

ゆま

つもねと 細りりとぞう

ぬきうさみのまかまわせ

ふくげんとくにねれと

もくもくわなづく

はるもく

もあくたとくわもく

くわんとく

だいとうとくゆくゆく

むゑひくら 恩を抱え

六考 眼耳鼻舌身意と六根

色声香味觸法といひもとぞう

樂欣 げきへんとくしとくゆみ

ひくもく

狀貌もくや ひひのくとくとく

かくまくひ 色紙とくとく

いきくちゑりとくのとくとく

へとりうづくゆくらん

女はうらら めあくしてわがまは

うへどりす。梵網經よりとすん

女のうららわへた。不せうらのいふや  
せせりゆめにてれづれい常しり  
もむく康へうるて心定めうを

うぐす

うぐす

自聖と書朱文云

自聖詩。十年浮海。一身孤影。對梨  
渦却有情世上無如。不欲險衆人到。

此誤平生

家廢はまきわめ。うりえ  
うりえ。御りといふて是うらやえ  
はうらのひやじに。御りともう  
ひやじへうら月の色もこそへもく  
とすあくくいより。うらふ  
うらふおこしやうつてうらうらふ  
たれの草とある。うるそよ。すいが  
いひあくうりいふらううつ。御方も着  
ちもくて。御もくのうらうらふ



はるかに ひとあらわすをめぐ  
せ活よはれたのよとそよがのや

りふすり 医療 寧富

いままで うきよてあらゆるゆ

こえまく

まくまく うきよてあらゆるゆ

まくへ神

まくまく すいじゆく 遠慮

相交 まくのゆきとまく

まくまく まくまく まくまく

乞方の御子たゞくしもるひよこしてゆき  
これうそとしのとてももとあ  
とあこゑ

後西宮　主定ひし井鶴抄曰由  
人手にさへアラトツヒシテシウカウ夜  
まへ西ハ角を用ひあつて雪りよ  
といりんせらきくろこ

百利　俗名化粧茶寮憲清秀郎九代  
姫孫鳥羽院より  
わの山のや

坐もじと　るまや、うづうてと  
いすとととととととととととととと  
坐月のちうくうと節こづと  
色あくととととととととととととと  
とととととととととととととと  
きくつとととととととととととと  
八重しのじくとととととととと  
てへ病ひとととととととととと  
ひまなれらととととととととと  
ひまなれらととととととととと

あくべくうきにふるひあてにりん  
ちぢむよのえをみつようう  
あうめりそとまひかといひもじ  
くわうそとおのうつまうく  
とき

栗柄弔

こぬ田代駒毛色

さねのくらとれ小節の萩のれ  
らうすんじりてとじん  
わくわく 開けのうた桂絃(けいげん)引加と  
くせ

えくまみづみ 枝のゆくしと  
おとんへあらまくへ秋葵の  
えくまとてつぶさざりあ  
月心うくんへこもうやに地作  
むまよとせゑとくらむと  
くいのうまくへくらへ  
かくまくへくらへくらへ  
くらへくらへ桂絃(けいげん)引加と  
らやせんそふよいんりのくら  
まとうひうわくへくらへ

卷之三

病氣の爲めに  
その爲めにもとより年  
月を経てから  
あくまでもこの走の  
久居する事は  
黒と白  
ちと云ふ事  
御うるさく思ひ  
大いに心に  
心をもたらす事

主の延べ年へいとくと

かくうさりよのをこあまゆひろ  
やくじんせつととくとくとく  
まくううそじつとくとくとく  
くわくれうすよしりゆゑとくとく  
れとまめあ義とくとくとくとく  
ものよきとくとくとくとくとく

よしめぐら

韓退之符讀書城南

詩曰 時秋積雨露 新涼入郊墟

燈火稍可親 简篇可卷舒  
子雲少人所愛也 廷史平日讀  
書上師聖人下友群賢仁傑曰  
草卷中方與聖賢對何暇偶  
俗吏詰耶

こくのく おとこよきうこゆうす  
うそくへやまとりふくとくとく

文選 梁武武帝の子昭明太子撰す  
不く六十とくとく

わくれう うけれうく

白氏文集 白樂天、詩文とあつま

ふまち

老子 は、まみへ平家へ伯陽又老朋  
もそく、其國のんへ老子経と下  
り、道徳はとくとく

南華八篇 狂子ひよし、南華真経と  
そく老子ひよし、南華真経と  
くとく

け國人抄書 物言得兼ひぐへけ國人  
書と、平野文粹のうづくま

和焉く、物を、未ゆうれわや、云  
ちて、ひづれ、つづきものも、もとへも  
しろく、じまく、未だも、もととせの  
本とくへ、角く、のうとく、ひづく  
二つとも、ひのうとく、ひづくと  
ひづくとも、あらそく、ととの  
いじや、も葉の、あくあく、なに  
えまく、かく、まく、あく、まく、  
さく、さく、さく、さく、さく、  
さく、さく、さく、さく、さく、

スノウホワイトスノーブル　家久、昆  
リハのヤクシテテナヒトヒのイハ  
ハウツハヌハスハツハスアモリツ  
ル今ミムクタハスモ　朝市松  
モシリハスハスモクスモクスモ  
ハシモトモハシモアハシモア  
ハシモトモアハシモアハシモア  
梁本城代ハサウエヨウモトモア  
モアモアモアモアモアモアモ  
モアモアモアモアモアモアモ  
モアモアモアモアモアモアモ

れりくらみ ひとの前後の文選  
をよよわたりておうとうわ  
えいあくわく  
むきうえは 実きは仰うる  
うへうひやいみえや  
わくもくとすのゆうのま  
やくくくくくくくく  
とあきうひがくとくとく

書 お光天重れ孫 い名門吉  
久昌  
糸ふうり わくへゆうくくく  
むくとくとく  
りくにむゆうけくよくられ  
のりくにむゆうけくよくられ  
まくらくふ ほん縁角よ秋の  
とくにねんとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく

うきよのあらんをくまし  
そやとひきかへてのとくは  
せうれんとくじくわん  
すくわんとくじくわん  
うきよ人のあらんとくじくは  
まくわんとくじくわん  
ゆきよのあらんとくじくわん  
えきよのあらんとくじくわん  
ゆきよのあらんとくじくわん  
ゆきよのあらんとくじくわん

新和名用圖カイカツ

西末解

うきよ 八重山より夏山を  
りゆつしむる可りよへば  
うまよ海へてゆく船をう

うきよ 石井とさくすよかう

うきよのあらんとくじくわん

うきよのあらんとくじくわん

「ふくのうちわつゝて、このて、初の  
つまむ内うつて」

深草妙抄

後鳥羽院乃仰化す

水樂

僕馬樂の事とあらわす

う　博物志云秦青振節悲歌  
聲震林木響遏行雲謂其友曰  
昔韓娥東之齊遺糧過雍門鬻  
欵飯食而去餘響遠梁三日不絕  
故雍門人至今善欵哭效娥之遺  
聲也二八女中よりて此のうた

深草く云く　杜佑通曲云漢有虞

云善歌能令深上臺起

郢曲

文選宋玉對楚王問云客有

次於郢中者一一元稹梅詩郢曲  
琴空奏郢之音固已流乎古之音

う辛旣と郢曲とよく

うううううううううううううう

うううううううううううううう  
うううううううううううううう



院の事もあつた。和琴  
がわざりて、おもむくし  
ておひらひらと、おもむく  
とまづやかにほんとうとそ  
とほんとうと、日本流の樂器へ  
洋流の日本流の樂器へ  
寺小僧こもじて佛小はづ  
けうとうすまうもくちあきうえを  
まもるよどりつらさん  
んとくまとはよやふくわうと  
もううきてめとくみいせとしらう

豫農ハ多角小屋をもつて居  
本多はさかうとりふのそよがわよ  
れどりより唐人へそといふ  
とくへとくもくとくとくとくとくとく  
多角一重の小屋へゆきりとくとく

鳥  
文  
庫

續文選

あらのとあるところ  
鳥籠トリカゴ、二天鳥ニヨウトリ、二不富美ニフミ  
白夷ハクイ 盆子

爲富不仁矣爲仁不富矣

白  
居  
易

叔齊

顏淵  
子禽

原德

子夏

南翠老人五柳先生深花處陳  
後山人賞不著之而以爲

卷之三

许由

由来 章天下とゆうらんとのあい  
えどもよ

高士傳許由隱箕

山以辛棒より歎之人を一蹴得

取飲、就樹於樹上  
尚以名、復遂去之。

りうのとこ うへて 和名集を頼る

利比作古幹水是く

あらわすへりうゑん  
えいじゆうしん

孫農 易水云、孫農字子元云家貪穢  
席、官業明詩書、京北功曹、  
月无被有業一束暮卧朝叹  
まうり人の竹を竹へひ 日本  
久にまみくすいわゆうも俗  
すれだく天とし

わうのううすはくもあはくにあが  
ときうわれ、私とよもれとくへ  
ひきうれとくれとくらしゆとくぬへ  
ひきうもとくへりうへまほくく  
よくわくらむとくへとくへとくへ  
ふまうくのくのくのくのくのくのく  
くのくのくのくのくのくのくのくのく  
くのくのくのくのくのくのくのくのく  
くのくのくのくのくのくのくのくのく  
くのくのくのくのくのくのくのくのく

りまもとくのよどとのくわいや  
すもあねへそくもとと梅の  
もみじといふへりしもとゆう  
あくちもくらひとせんけ  
よあぢかくまゆまゆま  
てあひのとてこへりめり  
もきりあらま乗りこまよと  
きもきりゆきりくせのあれと  
人をうきまくまくとれと人のわら鳥  
らきりきりやうれふ月あや  
きりりやうれふ月あや

めうこう甲苗うはきものたいく  
をつりとつるうと月のうわる  
え家タものもく  
牧角りぬとつともあれりくと  
月後えか  
りゆきとくらう病の下まを  
はくりとくらう病の下まを  
うりあとあいねくわらひあ  
野合ああくわらひあ  
えつてく風やれれ車ひうにま



もよそじのつまえりやわらぎ  
てひきよかんしにあそぶ、わうわな  
そそりひとへ音に  
くものあともくろりそれ  
都すへたとくのゆきにさく  
すくしてわざくわらしき  
うるそくへとくまくまく  
そまわせくわくわく  
れやへうりはくはくはく  
をあふせやうふゆうやう  
とももせきかいて、はま三せん  
音よかくらんや  
もよそじのつまえりやわらぎ  
うううれへねくまく

涼風よ悲秋のめぐらす音しう秋  
不つづくすりへうひまくさうより  
白樂天詩。大底四時心惄苦就中  
勝<sup>ト</sup>断<sup>ト</sup>春秋天<sup>ト</sup>のやう<sup>ト</sup>白樂<sup>ト</sup>

謹以八月八日一念心向佛

生々へ推古天皇（そうごてんのう）よりまつ秋も  
俱毘藍城（くびらじょう）にてしまれまくらを天童  
ありそくえてあらわすもつまむ

まうらへう カミヤエ茶をまうら宵  
中の雨日をまうら鈴明天會まう

わやわやくろ  
天平十九年九月

早苗

蒙古文

久  
角  
火

もののもうううううううううううう  
すきのうのへゆふくいのと

終被薰烟即使除

六月後 八事物云六月後秋水  
（アキノシタケルウツクシ）と云ふに行  
（アシテアモノノキナリテモ）  
（タヌキトコロ）

望月の月夜、月にて月と  
りて月とやまくらむと  
歌ふる月にてふらぶよみう  
り月のあはれと月と月と  
う月と月と月と月と月と

てかくりきをのむ注云六月後八月  
くゆ人皆之古人六月之以出行原臨  
後又們涼及絲竹之遊及約束之典恒  
例也不限晦日是称皆月後長元  
之比或人記拂念小舍人來丁暮皆月  
移之由催之件後六月十二日云事  
根涼云大後六月晦日百官しるく  
朱雀門小あくよりて後とぞうたり  
六月十二月二十九天武天皇命  
時そりやまつて今日家によ倫とこゆ

すと月とくらべてくらむくへ  
かの年の令下りてくらむく  
はすく喝りとくはまくはくゆよ  
ほはる用ひのせよ  
りとくとくらむくへてくらむく  
こうふくらむくへとくはくれ  
こうくくく酒をくへとくはくれ六月  
國ありとくへ酒の月とくはくれ  
くへ東鑑みくはくれ

セタモウリ  
毛モウカツシトツヘ  
云事根源云七月セタモウリとこモウリ  
天平勝宝七年モウリモウリ也巧真  
セタモウリとモウリセタモウリ也巧真  
女セタモウリ鳥鷹天行ヨモウリ  
セタモウリ鳥鷹天行ヨモウリ  
と淮南子後母活紀ナムアヌモウリ  
翼との羽とテ御女セタモウリ  
香衣とモウリ佐モウリの年色  
と小之火と牛羊のモウリふ又色り矣  
セタモウリといつよニ年のモウリ

必モウリモウリひかくも巧とモウリ  
風土記曰七月初七夜洒掃中庭施  
凡造設酒脯牽牛織女相會守夜  
者咸懷私願或曰見天漢中有交  
奕白氣光曜五色此為徵應見者  
便祚願乞富乞壽無子者乞子惟得乞  
一不得薰求三年乃得

毛モウリモウリ  
月令云仲秋之月鳴



物より三月月夜扇あり

印佛名　三月十九日より大一日

この日しあうの二日も例よりこれに  
名をもへこそ法輪の名号とあるが  
六根の罪を滅ぼす事佛名也  
よどももどろの切法のもうまうま  
や宝龜立年大月もうまうま  
和乃はへ無年佛名この日よりの  
法もして教生尊號のり格より見え  
うるあくそり相承よ載り　元亨

釋書九釋、靜安從西大寺常騰學法  
相<sup>シテ</sup>寺居比良山、讀十二佛名經、禮拜  
修懺<sup>ハセ</sup>其聲聞、帝國諸外間者聞  
者曰茲敕賜僧官、秉和立年卷置、  
官中季冬佛名懺<sup>ハセ</sup>

前文　十二月吉日とあるみえ十三  
日ふけしとてひそりらうせ  
名をもと人のつくりあすとへ十  
段八巻よ年のとつりよ幣帛とす  
うじきうじえ十段の事一き天香

天皇へひらえとおふ地國ひもよわう  
ひしの帝は馬よりそりてひもとの  
黒にけ幸わうてそよののくちほ  
こうすもろよ崩<sup>ハラ</sup>石といつてもも  
今、唯ウクイのむらとまうれ  
をちよとそとそとそとくらじる  
をゆうとゆうとゆうとゆうと白  
壁天皇へ田原ノミテ天紫<sup>スカ</sup>遊天  
曾<sup>アシ</sup>ハ角<sup>ツノ</sup>の陵に明天<sup>アマタ</sup>御<sup>ミ</sup>の  
陵<sup>ミツル</sup>ノミテ天子<sup>ミツル</sup>又<sup>アシ</sup>之處

みぶ御年<sup>メシ</sup>後<sup>ヒ</sup>の紀<sup>シ</sup>河<sup>カ</sup>よあら前<sup>アヘ</sup>と書  
てくづりあり

モリ

きあよけくもくもく

逃<sup>ハシ</sup>

云事根源云十二月晦<sup>ハシ</sup>日

ふぐのひさやうとやうれしく全<sup>ミ</sup>家

鬼<sup>ヤク</sup>とたとひ<sup>ハシ</sup>陰陽<sup>ヤク</sup>家<sup>ヤク</sup>家<sup>ヤク</sup>ととて

もあれも<sup>ハシ</sup>てほ<sup>ハシ</sup>てしじとて下

もあれととく人<sup>ハシ</sup>とゆ教<sup>ハシ</sup>つま

きて桃<sup>ハシ</sup>のう革<sup>ハシ</sup>へえ<sup>ハシ</sup>てり<sup>ハシ</sup>化<sup>ハシ</sup>る

ひくひく東<sup>ハシ</sup>とてめの<sup>ハシ</sup>あ

つとやかにふらり火とぢりと  
も車籠ちと鈎きいんまつて  
ひきくらよもよといのまつた  
てとさすはるゝ年の年中  
の度をととへうて見とる  
方翁氏のとくに日暮とてあまくら  
たりととてゆよみてやくらう  
又後ろとて大人けの布衣をとる者  
ととつしての事なり門とまつて  
慶元二年十二月より

す而後もひきこもる事多し

軍方辨 玉事根源云元延喜之歲乃時天  
皇屬靈と云々天代の方の之後を  
既て年號となりて宝祚といつゝア  
モトハ御名と仰すやすのうづ  
まろととんとすに和焉年而  
宣れ延喜天祐四月の  
後と云ふ  
小ゆきと階陽とへなほんと重複兩

とれままであり「よもやま」す  
わざであとかへるのれあみ日  
本によひされ  
へそをとらへる日本によひされ  
くわしとあへるのれとのそ  
くわしと天民端祥をとひま  
かとんじう  
三とくふま  
いそきう  
くゆう  
ひくのくわともう  
玉いんとま  
ゆきえり  
年のゆまと  
のゆてえまきくらう  
とくらはのりのりとくら  
のうりほくまゆ  
をめぐらすまゆ  
写文言へむよまゆ  
へたの音おとくさりとひねれ

まよの向に雲れを底に仰ぐ  
くももゆりやまとてはまる  
まほし

ち路ひまねて

素盞鳥

まく雨あくまづかの時高と巨  
且わまくまづかのれとしりま  
うそそまくまづかのれとしりま  
まんじりてこさんとまくま  
あとりくまづかのれのせまくま  
まくまづかのれのせまくま  
巨且、臺へ下

生、うねとくらつてくらう  
くすき晴明、蘆葦の傍よ見え

アヒトモヤウセモトヘアリ  
セロウリクルカヌテアリ  
カムクルカヌテアリ  
アヒトモヤウセモトヘアリ

ひせひわ

冬木

セロウリクルカヌテアリ  
アヒトモヤウセモトヘアリ

うるわすか うるわすか  
うるわすか うるわすか

すれぬか すれぬか

うし李白の豪放の漏れぬるを  
やせ餘ゑどりしそうり  
アハキの月の下よくうさじゆ  
うれあらの月をうりあくま  
わへらるるゆきよのうあこ  
そ多くとく  
きわくやまくわくわくわく  
うん月たへるう風のうくぐる

ははうれおよくまきて、うるわすか  
あはくうそくくせんもくひくても  
えん流浦日和東流去愁へのうき  
もうとくもくとくせんとつうおとく  
やうとくわくわくわくわく、御席とひは  
ようそのて、うらわすか、うらわすか  
ゆまとく人をくもんやまくとくわく  
もしのわく

東流去不居。極人住。ナシ時。往云身  
不得去。勿怨水之去。所<sup>シ</sup>ス<sup>シ</sup>傷已不  
能去也。蓋叔倫事。曹王於湖湘。  
有<sup>シ</sup>作<sup>タ</sup>。<sup>ニ</sup>參<sup>サ</sup>。游<sup>セ</sup>。<sup>テ</sup>郴<sup>ナカ</sup>。有<sup>シ</sup>釣<sup>ク</sup>。  
郴<sup>ナカ</sup>。遠<sup>キ</sup>。郴<sup>ナカ</sup>山。為<sup>シ</sup>誰<sup>シ</sup>。流<sup>リ</sup>下<sup>ル</sup>。瀟湘。  
去<sup>ル</sup>。正<sup>ル</sup>用<sup>シ</sup>此<sup>意</sup>。汎<sup>シ</sup>水<sup>シ</sup>湘<sup>シ</sup>水<sup>シ</sup>省<sup>シ</sup>水<sup>シ</sup>名

嵇席毛山次<sup>モ</sup>有<sup>シ</sup>之<sup>リ</sup>て

文選卷四十

三<sup>ト</sup>嵇康與<sup>シ</sup>山濤、絕交書<sup>シ</sup>云、游<sup>セ</sup>山次<sup>モ</sup>  
觀<sup>ク</sup>魚鳥、心甚樂<sup>シ</sup>之<sup>一</sup>。作<sup>シ</sup>吏<sup>シ</sup>此事  
便廢<sup>シ</sup>。安<sup>シ</sup>能捨<sup>ク</sup>其<sup>所</sup>樂<sup>シ</sup>而從<sup>ク</sup>其<sup>所</sup>

帽武。嵇席字<sup>シ</sup>叔夜竹林<sup>シ</sup>。七賢の  
其一人<sup>シ</sup>。晋書<sup>シ</sup>傳<sup>リ</sup>。

人匪<sup>シ</sup>君<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>。子賓<sup>シ</sup>。

乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。

乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>草<sup>シ</sup>。乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。

乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。  
乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。  
乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。  
乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。乃<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。莫<sup>シ</sup>之<sup>シ</sup>。

くわくとんのうの初めもし  
とくともへりてまくとくとく  
いすへ車もくわよよりをゆき  
くのとくとくやのくらでわ  
よくわくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく

きく

本へ通のくく トニ青面不輕

文代初

又まかへ生木はきと云

又右

又放とくとくとくとくとく

くくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく

小人とく

たけ初

平生の事後

多々案へ放とくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく

さとみ

亥情傳 一葉隨筆集四年六月七日

よつとてとこりりと日と接  
えり日りり清涼殿にて家勝王座  
と漁やう東人寺無福寺近脇寺  
圓城寺等處の僧衆もしく  
をこうこう化表漁師独れす  
りふす相原よ祥く

かくら 印緒の序(まくやまの  
徳とくづく不とりの序を)

アヒトのう圓白へ内事として体をも  
ふ所と在席とゆき(まくらの高  
五ノ山)

不そくとあおへとへそとねれ重  
り承ひゆるうめぬとくいも  
そそくしゆるれ爲め行船(カイ)  
門をくじみてとどめゆく  
アヒトとまわる(キ小もく)小松  
ゆき神よちのまくをくくとくとく

いそゞれやうやくのとくひやく  
ごくよづくとてうしるは陣  
とまわうつりひそくう法  
見下人のものもうかよん  
うちもやへつうさしにちと  
うえうへうけうれうく  
うれぬ所のうれうるう  
ゆうのわううととくの  
おぬはうせうれう  
九重 狂の力とく一ゑうりんあ  
てううじゆううを九重ぬ國こみ  
病巻 日暮ゆゑのうへう  
飼飼 よくまの内へもよわうる  
飼飼 二向へうへうへ飼飼 伝ゆ  
うへうへ雨ふ平お二枚車わ  
絹のうへうとまくやゑのう  
えへ陣るわう。屏凡の内かよ肩  
えとまく。妙秘おら歎を。洋  
をくへ行門 一本よきへとあ

とがまとへ形く門裏のまへ移  
わうかよ／＼ふもとといひる  
まゆの紫妙抄格芥かよんとう  
小板書名目抄よ水仙門中と云今  
の後とよあう

もをよ／＼今のは豪友のもう／＼  
の席下へらたう

陳よちのまよせよ 徒々號すと  
用ふきよ／＼又よ／＼とと打  
をも／＼と／＼

か／＼よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼  
よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼よ／＼  
陣してやうよ／＼よ／＼よ／＼  
の家してへ／＼よ／＼よ／＼よ／＼  
よ／＼打とて／＼よ／＼よ／＼よ／＼  
よ／＼ 懸妙抄云東市交四方有  
事ア南人妻ア一間(帖同清涼殿  
東枕置仰座ア(中枕有二階奉  
安御御神璽省有覆蘇芳(中御  
東南快四角有燈樓又帳南北敷

筆爲女房座、うぬ云也の敵の龜  
尾角よりさうりわづひと  
長火とまんじきの宝剣朱雀  
也

と那の陳して おとへて年め  
ちほりうて陳して想年りとま  
とよ年も云ノ時、内年ととし  
行司のもと人々、 行司とお言  
職察り等と云へもと人とへ行司の  
ソのくとま

はるまひを改め、 宮奉ひ

お王乃御室よりあつてひわうる  
とへれりえ、 は佛さうつてらうこ  
ほ紙をうりうりとおとへてお  
乃色うりうりとてへりたぬりうれ  
やれんやゆうりうり森のうりうれ  
うううううううううううううう  
はうううううううううううううう

平野住吉之裔大布称吉田人原冲  
不居物文

絶佛ノリノムト

延喜式才五女宮忌

詞内七言佛<sup>ヲ</sup>禰<sup>レ</sup>中子<sup>ト</sup>經禰<sup>レ</sup>染紙塔<sup>ヲ</sup>  
禰<sup>ア</sup>良<sup>ヲ</sup>伎寺<sup>ヲ</sup>禰<sup>モ</sup>草<sup>ト</sup>僧<sup>ヲ</sup>禰<sup>ク</sup>般<sup>ヲ</sup>  
長尼<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>女髮<sup>長</sup>齊<sup>ヲ</sup>禰<sup>ハ</sup>行<sup>ス</sup>膳<sup>外</sup>七言  
死<sup>ヲ</sup>禰<sup>奈</sup>保<sup>ホ</sup>留<sup>ト</sup>病<sup>ヲ</sup>禰<sup>ハ</sup>夜<sup>マ</sup>須<sup>ミ</sup>美<sup>ミ</sup>哭<sup>ヲ</sup>  
塗<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>血<sup>ヲ</sup>禰<sup>ア</sup>世<sup>ヲ</sup>打<sup>ト</sup>禰<sup>モ</sup>撫<sup>ハ</sup>肉<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>菌<sup>ヲ</sup>  
墓<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>壤<sup>ヲ</sup>又別忌詞堂<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>香<sup>ヲ</sup>燃<sup>ハ</sup>  
像<sup>ヲ</sup>婆<sup>シ</sup>塞<sup>シ</sup>禰<sup>シ</sup>角<sup>ヲ</sup>苦<sup>ト</sup>同弟六齋院

司凡忌<sup>ヲ</sup>詞死<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>直<sup>ト</sup>病<sup>ヲ</sup>禰<sup>シ</sup>息<sup>ヲ</sup>泣<sup>シ</sup>稱<sup>シ</sup>  
搥<sup>シ</sup>血<sup>ヲ</sup>稱<sup>シ</sup>汎<sup>シ</sup>肉<sup>ヲ</sup>稱<sup>シ</sup>菌<sup>ヲ</sup>キ<sup>シ</sup>稱<sup>シ</sup>穢<sup>シ</sup>墓<sup>ヲ</sup>  
稱<sup>シ</sup>壤<sup>ヲ</sup>又一說<sup>シ</sup>佛<sup>ヲ</sup>稱<sup>シ</sup>綠<sup>モ</sup>稱<sup>シ</sup>とわう  
えくわす<sup>シ</sup>とこう<sup>シ</sup>とこう<sup>シ</sup>とこう<sup>シ</sup>和<sup>シ</sup>集<sup>シ</sup>雜<sup>シ</sup>  
教<sup>シ</sup>學<sup>シ</sup>月<sup>ヲ</sup>就<sup>シ</sup>かみ<sup>シ</sup>り<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
ちく<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>シ</sup>の<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>  
そく<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>  
拂<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>拂<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>  
もう<sup>ハ</sup>や<sup>シ</sup>か<sup>シ</sup>拂<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>ふ<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>け<sup>シ</sup>

アラシノタモトニキテ和錦<sup>コフ</sup>アマ  
ササニシテ<sup>ニキテ</sup>御<sup>ミ</sup>通<sup>ス</sup>カワリ  
伊勢<sup>イセ</sup>天<sup>ミ</sup>空<sup>ミ</sup>アサヒの扇<sup>ハ</sup>  
ササニシテ<sup>ニキテ</sup>雷<sup>ミ</sup>御<sup>ミ</sup>トトロアドウリトカ  
別<sup>ワタツ</sup>雷<sup>ミ</sup>御<sup>ミ</sup>

春日

春日四<sup>シキ</sup>ノ祈<sup>ミ</sup>大<sup>カ</sup>御<sup>ミ</sup>共<sup>モ</sup>第一殿

御<sup>ミ</sup>雷<sup>ミ</sup>命<sup>ミコト</sup>第二殿<sup>ミコト</sup>、齊<sup>イニ</sup>主<sup>ミコト</sup>命<sup>ミコト</sup>第三  
殿<sup>ミコト</sup>、天津<sup>ミツ</sup>兒<sup>コ</sup>屋<sup>ヤ</sup>根<sup>ミコト</sup>命<sup>ミコト</sup>第四殿<sup>ミコト</sup>、磐<sup>カガ</sup>大  
神<sup>ミコト</sup>、祚<sup>カガ</sup>渡<sup>カガ</sup>景<sup>カガ</sup>雲<sup>カガ</sup>二年大和國<sup>カガ</sup>ニ笠

山<sup>アマツ</sup>ノ御<sup>ミ</sup>トトロアドウリトカ  
平<sup>タケ</sup>野<sup>アマツ</sup>ニ城<sup>カシマ</sup>カリヘ那<sup>アマツ</sup>トヨウ近<sup>アマツ</sup>  
木<sup>アマツ</sup>ノ平<sup>タケ</sup>ノ御<sup>ミ</sup>四<sup>シキ</sup>今<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>  
久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>乃<sup>アマツ</sup>御<sup>ミ</sup>おあく<sup>アマツ</sup>えもん<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>ミ<sup>アマツ</sup>  
久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>日本<sup>アマツ</sup>ヒムク<sup>アマツ</sup>久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>ノ<sup>アマツ</sup>トモ<sup>アマツ</sup>  
久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>原<sup>アマツ</sup>後<sup>アマツ</sup>久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>時<sup>アマツ</sup>海<sup>アマツ</sup>  
久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>シテ<sup>アマツ</sup>二<sup>アマツ</sup>輪<sup>アマツ</sup>

三輪<sup>アマツ</sup>五<sup>アマツ</sup>和<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>トヨウ日本<sup>アマツ</sup>ヒムク<sup>アマツ</sup>  
八<sup>アマツ</sup>九<sup>アマツ</sup>子<sup>アマツ</sup>太<sup>アマツ</sup>己<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>ト大<sup>アマツ</sup>國<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>  
九<sup>アマツ</sup>十<sup>アマツ</sup>月<sup>アマツ</sup>鬼<sup>アマツ</sup>魄<sup>アマツ</sup>出<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>久<sup>アマツ</sup>木<sup>アマツ</sup>和<sup>アマツ</sup>

國之法也。不獨中國有之，猶亦有之。

まち布称 まかとくさきうこ國  
まかとくさきうこ國に人跡よあらず故称されしも情に  
かわらもあとこすむばやしの

國 は社へ事有ゆる御子を勧請

人原野 ひみと小道とよし文治天皇  
何うさてひまめりつるまこと日休

（主）ハ行とて未即く后也又人主  
活のたゞりあんうたうううう

吉尾 大宝元年奉教懇々々々  
社とえり 日吉 三輪 當社  
をも同体ル神々 近ノ式才九神名  
帳ヨ山城國高野郡 松尾神社ニ  
座たり

秋葉  
この頃より萬葉の詠歌  
花の御歌はひうらせうれ



れ額子のゆきうさぎを死んでやる  
かあくわれうのまにまかとへ  
まゆうりもとえりてうる  
じかくわらふらむとてうる  
ゆうすくわらうゆうもゆうと  
ゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
ゆうゆうゆうゆうゆうゆう  
ゆうゆうゆうゆうゆうゆう

新古今の開拓

古今

也。予之不以爲子也。予之不以爲子也。

時後　又自序より  
傳時移事去樂盡悲來

節守 水をてての葉よおのすい  
めぐらしきりと節守ととめぐら  
里へわざててくさあらかづれんや

桃李不言自成蹊

史記李廣傳贊

桃李不言春榮暮

煙宿

誰擱

系櫻

拾芥中末云京極家

門南京極西南北二町役入道山家

式大入道殿家上東門院乞

ま義寺

力杀りかよう後一重隣り

幸一の

景子

ありゑ藤家よへ室宿園白杉園云

すみきと通じて乞ひまし

志とくまうまを

首ノ木の

多のせよてこむひどく志へく

もうもまほへうりうり

庄園多くして

通長云や病中

小は病中へ庄園多くあ附され

すうと重ねてあ

秋空の

我印雲孫(常人也)

くわゆるくうち後段用白人也の

後

金堂 俗名集云佛殿金堂へ風

雅集よこのたはめのまほうて

くわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

童子院

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

丈六 佛のしきへよまう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

くわうくわうくわうくわう

のりやうゆくかのくさびの町  
まろえあらそよんすとわざん  
ちゆらまのじきさんじとくと  
くもよしんへ堀川院の西首  
半身ひりやうじいとくにゆへを  
よろはれのとまれをし  
てひゆえくえさうくわくえん  
風雲夢をとづくふるのとれよ  
をすよせうす

鶴見。くらうとくわく  
人のよきくつ羽をすくへ  
色ゑどそりうすくわくす  
人ゑくらへむとくわくむ  
こゑへくわくす  
よううううううのへくわく  
人ゑくらへくわくす  
白鳥のくわくすとく  
高年と人向縁と人のくわくす  
トとくわくす

淮南子曰楊子見達路而哭之爲  
其丁以南可取北墨子見練絲而  
泣之爲其丁以黃可取黑高誘註  
曰相其本同而末異

堺川院百首 あさり百首あつ初交  
八百三へ植大納言教宗云實勸進之  
事よのじしらのうへ則云實  
アリキ堂菜へ也

中國少うる人多と云おここの日本  
書をなりて不づくとまじめり  
まじめりてつゆうとん新院のわう  
をもむけてひまつととけむくとわ  
もあくうれととのまやつとまくと  
くみのじとくじとくじとくじとく  
へゆりくともうれくじとくじとくじとく  
あれくじとくじとくじとくじとくじとく

白國少く 天子へ修と善まふ所  
アシカシトシテハ云々と清國ニシテ  
清信ノシ

敏臺灣内所

毛ヤニ種ル紙墨

ノリ剣ヘ宝剣ノシ天叢雲々劍  
ノリ金ヘ赤雲々天也ホ赤わの  
石色ヘシロセモリ对法人いりう  
て天也ヘシロセモリ不ヘト校ヨリ  
アハ坂瓊杵玉トノ王也ホ赤わの  
のソモチヒキナリサワリギリヨ

ミヘソクモミヒソク

鬼也ホ 黑不シモヤホ統ヘモハズ

ハ後トシマムツヘ後トシモハ

新院アリルアラス

ツクモリ

アラキリテモハモヤ、 美義

ノトヨヒトササギのシラジトモハ  
モハモヤ、 モモハ伴氏也の

多義義の下也、 フクシモヤリ

印奴丸字(

涼圖リヤウ

リヤウ

涼圖の年へりあれうとトモ  
シテシテハ内ありぬる移あと  
さけりへとすとひて布のま  
そんに人のまつらり平野  
てトマサクシテ

停戸

急乃うを 壱襄抄云  
さやわんの付に皇舟ス日易舟  
そちのなる

のアキ

壹襄抄云停戸の品

きづくとさげ革の下よん  
布ふれを刀をひねもと紫葉  
首根等シテ一絆よととと翠巻と  
小布のともと布ノ帽額エカツとす  
本貯へりけりうりうりうり  
あえ

毛刀 黒化して張り立てる

平底

そと足底

印子

あくとひまく

もくはりへとおひるのさうりかの  
事とのゆゑでとよ  
見て後からあらゆるやうをと  
てくわざをすがりと  
いふやうなこゝにあ  
すむなぐらのゆきのまことと  
のうぢんもあつともう  
あらすんのうかく人のよしと  
くたうていふをりうるの平成  
三十六年八月

蒙古語  
蒙古文

かわきのてくとえぢりくへ  
きうへんじゆくのうせに

金匱要略

後漢書列傳七欽書曰臣

夜人定後

すきの おもひのゆきもじ

つかよつて

かく人のてのとひ 彩繪まよにや

あぬうやう写のとくとくわ

うてゆうとくとくとく

たまにわくわくのとくとく

即ちくとくとくとくとく

文選立十六潘安仁うちも楊仲武  
誅曰技扶散書屢覩之又有造有

写或草或真執玩周復想見其  
人紙芳千千汗露千巾白玉天  
感舊詩卷詩夜深吟罷一長吁老  
淚證前過百二十年前舊詩卷  
大刪和九人無

人乃知其人也十  
泣れりとまうへりうひてゆう  
くせく失所ゆくゆくゆくゆくゆく  
ゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆくゆく

かくの日は、まことに、たゞ  
ふうきをもつて、我へ、かにゆる  
そぞれらへ、かゆくわざるも  
よすまんじて、そぞくらへ、  
そよがへおもづけ、そよがへ、  
わらひこあひの、そよがへ、  
うやうやしく、まもりゆるに、  
わううくの、そよがへ、  
年月へと爲めらるゝ、あらゆ  
ことわらひの、ゆふらるゝ

もそえられへりとひておども  
もくへ年へはまの草へすくさう  
あはんのをやがくととてへれよ  
じきのわとおとせよとおとせ  
くらんあはんつへとれて田へ  
くらんくらんくらんくらん

（元）

中法 人氣へま未生へ中向よ先  
立法のくらとゆうゆう中法とろ  
くみ法へ毛立法行藏毛へ或ハ二吉

乃もせき日のろけび修らうへ  
死津毛井井を常に寺よくまう  
立法 人氣よ毛へ立法行  
くのてだりくのりくのりくのり  
くのりくのりくのりくのりくのり  
立法 人氣よ毛へ立法行

周章 アハクニ 横

立法 やよ毛へ立法行  
くのりくのりくのりくのりくのり

（元）

平九日

りあはれな

立法 人氣よ毛へ立法行

下學集曰穴賈上古時

倭漢兩國未知家人居士窯恙虫  
蟻久故本朝書札未相勸曰完賢  
言土窯之穴貲闭塞可防恙虫  
恙虫之字戰國集よりもく  
行くとくにいの内しとくとく  
俗へはるひ未よ完賢と書へども  
すうとくとくとくとくとくとく  
書簡尺牘の書尾よ自薦保薦自復  
至祝珍重すよくへてよく  
て完賢へてとくとくとく

かくうらへゆきにゆふく くくくうゑ  
傷乃中々云ぬ

年月をとく お、玉蔓より年月へ  
くもれわれとわくく つゝものあ  
くまとぬく

くもくのへ日くふく

文選二十九

古詩曰去者日已踈來者日已親  
出郭門直視但見丘與墳古墓犁  
爲田松柏摧爲薪白楊多悲風  
蕭蕭愁殺人思還故軍回欲歸道

無回 詩曰去者謂死也來者謂  
生也不見容貌故踈也歡愛終  
日故親也

さらて とく年月をとくと思  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとく

とくとくとくとくとくとくとく

卷之三

卷之三

率於壁 翻譯名義集中七宰堵  
波西城記曰浮圖又曰偷婆又  
曰私偷數皆訛此翻方墳亦翻  
圓塔亦翻高頭義翻靈廟劉  
熙釋名曰廟者貌先祖形貌  
所在也又梵名塔婆發軫曰說  
文元無此字徐鉉新加云西國浮

圖也言浮圖者此翻聚相成壇  
圖經曰原史塔字此方字書乃  
是物聲本非西土之號若依梵  
本座待佛骨所名曰塔婆

文集 古墓何代人不知姓字名化  
白氏

為路傍土平、まます生。

其處多是、その處しま

ちゑむすらうううう、細の

うりえへすもあうてよとやうそ  
おひこひいといとううくよ  
のあひうや一筆の筋もあは  
きのひううううううううう  
キムハスノキムハスノキムハス  
キムハスノキムハスノキムハス

アヘムハスノキムハスノキムハス

人へう 人へう 人へう

人へう 人へう 人へう

人へう 人へう 人へう

九月半、ひまわりかくふすとし  
てまうそゆもて月んぢう

とひふせりう、不わうそちう  
いがまきてつうまひあとすうの

病もまくまくまくまくまくまく  
まくまくまくまくまくまくまく

もよやくにひらめかしとておひづきを  
うひりやあれうるさむれどもれど  
あきのつまとたぬくとあるゆゑの  
かわらせてやのくれくもりえ  
ゆくはとととととととと  
わき月みくにやくととととと  
うみくにトロサ  
てあらんやういそととととと  
アキハナ明のうくのく  
くまんやうくにくにくにくにくに

わきやまくと  
まくとまくと  
行くあゆゆ  
とくは  
とく内裏はくわくもくしてまく織ぐ  
かくやくとくうにくうにくうにくう  
くくもくとくうにくうにくうにくう  
よき輝く尾ひうぐて黒鳩あく  
くくをくくとくくとくくとくく  
くくとくくとくくとくくとくく

アシケ、カヤツリ、ヒルムラカシ

栗草

新名へうつまくとし

す麿門院

佐乃院の母后、洞院の母

に上原まみ雄ツバタガ

園院

拾芥中末云園院ニ承、南西洞

院西一町冬嗣大臣家金園、疊木石云

李云傳領之

えりへて

葉八箇あぐ、葉八枚

甲香

見八箇あぐ、葉八枚

ハリのやまとさうりて、いき多く見の  
さくじく、或も圓二のほりりんごの  
ひとの若へをくわうりて、けりとを

甲香

本草圖經曰、甲香今醫家

稀用但今杏家所須又有大小

用小者住也可聚香使不敢也

和名集曰、異物志曰、甲香俗曰、螺

属可合衆香燒之皆使益芳烈

燒則臭

（金子）一本の木とあらうとも

りそやむくや金はるも

きとまどいとひよけくも

馬ぬけのへとまわるとひよけく

やくよかとまわとひよけく

くわくに見ゆうさんとへきわく

くわくに見ゆうさんとへきわく

ものまくら人のまくらにまくら

とへくらにまくらとくらよがくら

くわく

くわく

くわく

くわく

くわく

くわく

くわく

（金子）まくら

（金子）まくら

まよひつとよううトおれ  
タア金てうかとあくべ  
のうとんかのうき  
れゆめとくとく  
キムツモウカシルトク  
スミハラヒ  
ミスルのじら  
のすみとえはる  
お行よさへれてあく  
き一まくらし  
まくら

あくらりとんとく  
部とひがとまく  
ひほりへ金てゆ  
人の事にうそと  
人金とうそと  
ちもととく車に馬金の  
もととあいとへまく  
きくと金とととと  
きくと金とととと



せうへはくらまうのてもうすと  
さんあうよわへいづとうもうせ  
りそく丁石下三一條へいづと  
若こつてのとくへきもくせと  
ひくろもく淮もくとくつ  
てえむとくとくとくとくとくと  
名利の安とりしりふくのく  
とくへはくらまうのくのく

よくす

名利よくくんで

莊子遼陽篇

正為名義正為利名利之實不  
順於理不監於道

害とく文邊不壞寶以實害  
不不飭表以招累

力代後へ金柱へ斗不如生前一  
樽酒唐書秦王引尉遲敬懷為  
右府參軍屢立大功隱大子嘗

以書招之贈金四車固辭秦王曰云之心如山岳雖積金至斗豈能移之太子者謂大宗也隱

莊子天地篇藏金於山，珠於淵，不利貨賤，不近貴富，不樂壽不衰，天不榮，人不通。不覩窮，文選東都賦：損金於山，沉珠於淵。同第三藏金於山，抵璧於谷，註云：抵側擊也。

金於山藏珠於湖不利賊不近貴富不樂壽不衰天不榮而通不  
覩窮文選東都賦損金於山沉珠於湖同第三藏金於山抵璧於谷註云抵側擊也

袖袖、金玉声竜門原上土埋骨

もじにまづく

うにつまひを  
之船の落よ  
うて右首乃子落とす後よかう  
しわうじへ落せんぬよ落せ  
と月夜落せんぬりうる落せ  
れと世官とくと落せんぬ

史人聖人云々とては、後より  
孟子萬章下篇、不貪者、辭尊居  
卑、辭富居貧、辭尊居卑、辭富，

居貪惡，辛宜辛炮，罔擊折孔子。  
胥為委吏矣，為棄田矣。

人乃之而與之。莊子逍遙遊曰：奉  
世而譽之而不加勸，舉世而非之而不  
不如沮。定辛内外之分辨，辛榮辱  
之境。

參之又可謂之無愧乎？韓退之  
送李愿序：與其譽於前，孰若  
無毀於其後？與其樂於身，孰若無  
憂於其心。

易之名，通鑑魏主殷曰：送奉勿取  
有名，如書地作餅，不可啖也。晉  
書張翰曰：使我有身，後名不如即  
時一盃酒。

多惠少利，以偽也。老子曰：大道廢，  
有仁義。智惠出，有大偽。王分甫註  
曰：智者知也，惠者察也。譬其有知  
有察，此大偽，所以生也。急齋註曰：  
不幸，而又有一小智小惠者，竊仁  
義而行之，則偽自此滋，亂自此始。

又老子曰絶聖<sup>チ</sup>弃智<sup>ツツ</sup>

煩惱

大智度論曰煩惱者能令心煩

作惱

故名煩惱ト 又曰屬<sup>ス</sup>婬<sup>ス</sup>屬<sup>ス</sup>瞑<sup>ス</sup>

屬<sup>ス</sup>癡<sup>ス</sup>是名<sup>ス</sup>煩惱<sup>ト</sup> 大藏一覽詳也

可不下<sup>ハ</sup>一條<sup>ト</sup>

莊子齊物論曰万

可<sup>シ</sup>方<sup>ト</sup>不下<sup>ト</sup>方<sup>ト</sup>不下<sup>ト</sup>方<sup>ト</sup>下<sup>ト</sup>ナリ 又曰可<sup>シ</sup>

辛<sup>ト</sup>可<sup>シ</sup>不<sup>ト</sup>辛<sup>ト</sup>不可<sup>シ</sup>物固有<sup>シ</sup>所無<sup>シ</sup>物固有<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>可<sup>ト</sup>無<sup>シ</sup>物不然無<sup>シ</sup>物不尋<sup>ト</sup>故遂通<sup>ト</sup>矣<sup>ト</sup> 也若惡是非可<sup>シ</sup>ト<sup>ス</sup> 俗不<sup>シ</sup>め直<sup>シ</sup>物<sup>ト</sup>一切<sup>ト</sup>世間の物論<sup>ト</sup>

めより人<sup>ト</sup> 世人<sup>ト</sup>も逍遙遊<sup>ト</sup>曰

行<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>若<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup> 天<sup>ト</sup>名<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>若<sup>ト</sup>惡<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>二  
六<sup>ト</sup>相<sup>ト</sup>人<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>思<sup>ト</sup>若<sup>ト</sup>不<sup>ト</sup>心<sup>ト</sup>惡<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>よ<sup>ト</sup>而<sup>ト</sup>も

ト

めより人<sup>ト</sup>

世人<sup>ト</sup>も逍遙遊<sup>ト</sup>曰

至人無已<sup>ト</sup>神人無功<sup>ト</sup>聖人無名<sup>ト</sup>梁<sup>ト</sup>  
武帝建寺度僧達磨曰無功德

名利の要<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup> 俗<sup>ト</sup>繆<sup>ト</sup>ノ初<sup>ト</sup>

應<sup>ト</sup>映<sup>ト</sup>す<sup>ト</sup> 名利<sup>ト</sup>り<sup>ト</sup>し<sup>ト</sup>の要<sup>ト</sup>

二字衍文<sup>ト</sup> 莊子盜跖篇小興名就<sup>ト</sup>

名とまことの句。非収要。名卷。  
やとうり要ひまよ修みづけまよ

食て送つまよし

或人ちうれんとくよ念仏の心に睡了  
とうれしてりとぞくづくゆうけうすい  
してこえそくうとやりけんとよを  
まくのさくらんり。念佛へそと  
えきくまくうくりゆゑとくづく  
又往生へ一定とありへ一定不空とくへ  
不空へといふくうもと無くへまよ

もともといふくうもとえまよ  
ウレんと人。幽室へ姓、漆田氏美

作因縁圖人。

國橋圖よむれ入画とやうとまうじ  
とくづくくらうとくづくとくづくへあま  
いがくづくくづくとくづくとくづくと  
栗とのくづくとくづくとくづくと  
くづくくづくとくづくとくづくとくづく  
よするへまよへまよへまよへまよ

マク

アラタナリシルモ　タタキタク

アラタナリシルモ　タタキタク

栗とのんびりて

美木よあさとう

ハヤシ家六本町小堀だわう常よ

トモと命くよまとくつぐひふ  
（ゆき）とモアふと烹てくつぐり人  
子よ豆堅（まめ）いひくとえ伊豆國  
シカよちく人のじとらわうみ殿と

くくくくく薦（すすき）とくくくくく

（或）よ啄（くつき）とくん

廿月又日が暮れ（くろ）馬とんぐり  
（く）車のそと難（むず）ててて見え  
（く）は各ねりてくらうさん  
（く）り（く）り（く）り（く）り（く）り（く）  
てふ（く）り（く）り（く）り（く）り（く）  
じ（く）り（く）り（く）り（く）り（く）り（く）  
（く）り（く）り（く）り（く）り（く）り（く）  
（く）り（く）り（く）り（く）り（く）り（く）

わくえ時日見はさみすのをくうと  
とくらうんちくくらうんとせのをく  
きのふくわんとくうのくう  
かとくわうてけくらうんとく  
よゆつゆくま  
生れりしまくくよくわんとく  
とくくとてゆうてゆくくくくく  
くらうとへやくくとくくくくく  
のくれへやくくとくくくくく  
れもくくにとくくくくく

とくんうらとくくくとくとくとく  
てくくくくくとくくくのくくく  
くくくくくとくくくのくくく  
くくくくくとくくくのくくく  
くくくくくとくくくのくくく  
くくくくくとくくくのくくく

競馬 競馬  
せりとくよ  
きのやくうとくん きのよん  
くのくくいれりとくくく

萬葉の愚人乞妹兒爾も  
ヨナカシモワケモコニ  
うううゑ(

今へりてはまづひいて  
もあらぬやまともありよ

くまきん

橋

村と源氏の歴流

教網 三言宗より論を教とすと教  
おもむきのとひれと事相とへ

氣あつ

家も葉トよげんのう

タツヤ

しわぢのれ

眉額をもとれて

日のくわざと

二乃舞のあそび 伶人の舞と画  
ゑあくしておうすに面と安摩  
くわくと舞あうとみよ舞と

二乃舞と云ひ

思ひりくわうて 突飛狂治の

せうか大黒、思ひよ入て思ひく  
らしきうてくわうととくの念をゆ  
まほまほのゆんとくをゆくを  
ふゆくわうとあのもくゆくから

ふゆくわうとあのもくゆくから

やうそ無からむとくをん  
すくへとさうひて今まくあ  
わらはるすむりうてりのま  
ほよしもはのめんたり  
うたふとれきとしりんまくか  
くらきとけりの年をくら  
マテシルとくれどみのめや  
もとゆまてれひうるに文をう  
ちがてんがういのうくわん  
うるさぬり

えんき 鮎のまくらやのやくよ  
りうま風絕陽ひまかゆ  
ゑもくつこんと 有<sup>シ</sup>事便<sup>ハ</sup>入<sup>ル</sup>主  
人<sup>シ</sup>莫<sup>ハ</sup>向<sup>ク</sup>誰<sup>シ</sup>、白氏文集遙見父家<sup>シ</sup>  
便<sup>ハ</sup>不論貴賤<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>親疎

キル行のわ<sup>シ</sup>アの<sup>シ</sup>うりうり  
くわく、<sup>シ</sup>月<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>ひ<sup>シ</sup>く  
くわくはやううう<sup>シ</sup>およも<sup>シ</sup>さ  
くわくとゆううう<sup>シ</sup>およも<sup>シ</sup>さ  
くわくとく<sup>シ</sup>くわくとく<sup>シ</sup>く

すくの見中ひりそくとひよの處  
よしもりしうきのうめいとあがえの  
ゆすみのうわくれどももう人  
もあじとくはるゆんくもくめり  
くそくとくうてのとへあくらや  
てうのとくにせのあくらよへる  
獨りそくの車のえりもつるよ  
つとくとくのうきくとくとく  
もぐのまわたりすびとてひな  
まうまうゆかとくとくまうめ

情師ととまつりをまへ風にさ  
そぞれをあやまつたものよりもさ  
みひつもと寝そぼう。童心歸よ  
きくやくの出凡す。いはく人間の  
天心里ともいふてうつるもくらん  
のまへもくらう秋の節らへかね  
らうのう病へひまわしてひのむ  
とまへりあひよのむらこ  
ねひそくうりやまの津をもくらん  
うて月のそれをまへ定ま

ひやまき ひやまき

りおようだくさん

(表紫表是)

少(ホリ)タク

御簾(マカ)

白(ホシ)タク

白(ホシ)タク

筆(マカ)御許(マカ)

三(ミツ)のあよ(アヨ)

三(ミツ)のあよ(アヨ)

ひづれ(ヒヅレ)ナ

ひづれ(ヒヅレ)ナ

いさな

いさな

このひとの鳥(トリ)の  
名(メイ)をいひ(ハサウエ)

義(ヨシ)

すとと(スツト)

すとと(スツト)

代(ダ)ヒ(マ)シテ(マ)ヒシテ(マ)

のよをすとと(スツト)シム

和(ワ)名(メイ)集(シラフ)之(ノ)

床(シラフ)車(シラフ)

りづれ(ヒヅレ)ナ

もあ(モア)マ

古(コ)のルヘ(ルヘ)い(ルヘ)  
と古(コ)のルヘ(ルヘ)い(ルヘ)用(ヨウ)

和(ワ)名(メイ)集(シラフ)之(ノ)

床(シラフ)車(シラフ)

りづれ(ヒヅレ)ナ

もあ(モア)マ

古(コ)のルヘ(ルヘ)い(ルヘ)  
と古(コ)のルヘ(ルヘ)い(ルヘ)用(ヨウ)

貴重なるものとて車の里へもあ

卷之二

古文書考

卷之三

卷之三

かくまえしのあれ  
又其心まゝりあら  
けの後不<sup>ト</sup>うてううす  
るの此のやうと良え信ふとゆえ

（この事よりて脇ありてまづうら  
塔ノカニシハタキのう枝ノ木れを  
けりは人情の事とぞいひ多  
ひるふうスルトシの本とぞ  
もとくら木根のよきんへそりくる  
乃そいひとひくいふくら  
てこくらくせとりうそてくら  
えねむりたうら塔にてよきんへそ  
波乃そくじよきのう

やうと見へ又兄弟姉妹とも云背  
まともも

柳原八色子。強盜事件と年譜と傳記  
の複数を複数より引用してあるのだと付  
る。

お人間の心のうちをうながすにあつては、  
いはくはまことにあらうとこゝそめ  
とゆきてゆるまれへたの前へ  
とくとくのところのまへり  
とやうむねいのやまへりとくとく

萬葉集

毛詩坤風終風篇寢言不寐願言  
則嘆注曰我是憂悼而不能寐毋  
思我心必是哉我則嘆今俗人嘆云人  
乃我此古之遺俗也 琥碎錄曰白  
墳嘆子日酒食印日大吉辰日婚合  
午日喜事酉日客至戌日嫁思亥  
日君子思餘皆山漢書藝文志 嘆耳  
鳴也 雜古十六卷師古曰嘆音丁  
計及 李濟翁資服集今人嘆必

自柷所祈之案坤終風篇註願猶  
思也言於我也蓋他人思我則嘆  
之也鄭又徐古口遺詰每嘆云人道哉  
以為他人說我則嘆此正得其願言  
者非呢願之願非言詰之言今則自  
柷乃由誤解詩句尔 容齋隨筆  
第四曰今人嘆嘆不止者必啜啜  
祝曰有人說我婦人也甚々嘆音  
帝皇元

先般の院の言膳議事よりして  
の如きと以前の如きと併合とも思は  
てくらむと雖も、さうじてくらむの如  
きは、いざるどもとの中へまぐって  
おもよしく、考へるに至れり。併しよん  
とて、うなづいて、いわば、有識者  
のまの御んとて、うなづいて、せこ感  
せぬをあらう。

光親鄉  
十二日  
東鑑二十五年久三年七月  
桉察鄉光親去日步多  
法名西親  
者為武田

十二日

東鑑二十立美久三年七月  
桜察郎光親去日  
法名西親者為武田

光親去日  
法名西親

者為武田

立郎信光之預下向而鎌倉使相逢  
于駿河國車返邊依窮可誅之由  
於加古坂衆首訖時年四十六云

御室とく続室ともさう  
ゆうのやうのうわを

蒙古文

老ありてよりて道とりやんとあ  
じゆるれづかれて御身りくへれり年  
りそよぎのうすに病ひよどくた

わやうるまんじわうくうりつ  
ひ人あらて白山の東山はつとめを  
ていとい今よきわめうるそと  
羽ノ木やまくらと手平とくとて金  
律へてはれにうるやまととくとく  
と落葉の十日よけりの森といひく  
りつてあまうよこへやのうとくとく  
ととくとくともうれにつけりかうく  
ふうくはまくのうとくのう

卷之三

老きくしてアラクシルモノ

朱文公勸學文が謂今日不學而有  
來日力得今年不學而有來年  
日月逝矣歲不我延嗚呼老矣是  
誰之愆

うふふ

李卓吾淨土史曰古人

句の眞待老來方學道古墳盡  
是才年人 待老來始眞學道  
古墳多是才年人

とくわくものうやまく

莊子蒙伯

王行年六十而知五十九年之非  
則明歸去來辭字今是而作非  
ひづるまも  
ひづるまも

あひゆくさくへつのはづる  
えんじゆくちゆいもくもくと  
ひまかよつてはづくへぢようく  
づくりくじうせのうじく  
角の本からへ床へ新く角を生  
らす一木ひづるみくと云々<sup>と</sup>  
よ角とますりぬよ主節ゆくと清う

豫林八十日

徐林寺大名東山

禪林八十日 緯林へ寺へ名へ東山  
承觀嘗て其承觀作妙の化も性  
生十因一生ゆ一廣大善根故三裏  
罪消滅故三高緣深厚故四光明  
精進故五智慧廣持故六極樂化生  
故七三業相應故八三昧發得故  
九法身同鉢故十隨順本願故  
或曰心海次第後櫻九よもんのと  
心戒

人念不至

萬葉集

藏文

月十八日

いのじよをひるみの人の  
くわくわくわくわくわくわく  
りんのいもんひと人の東涌寺  
はまゆき山へ才子しとく

毎長の山伊勢國よりその都へ來る  
とてかくありつゝうといふもあらそも  
うちや日くうり日くしあの川の人  
鬼々よとてあまくみゆめうきの國寺

應長 駄園院の年号

ひりひのまきと拂ひまくしま  
伊勢やゆよかでいれりうとわう  
院ひら様も 一ふる路ひきよわうつ  
うがみふと見ゆのういの義發  
さくへ 父もかよりくうきく  
るひや  
毛の辺りもす月のもとゆ  
でまんとく年のもとよびても  
車とくをくわくわくわく  
とくねるよくくんとくく  
マクルとくくくくく  
くまくまくまともほりにぬくとい  
くらくらくらくらくらくらく  
とくてもくらくらくらくらくらく  
やくらくらくらくらくらくらく  
あくらくらくらくらくらくらく  
らくらくらくらくらくらくらく  
毛の辺りくらくらくらくらく

心在と云ふて、口は言ひ難い。かの急  
ひきと

もとまき

白  
天  
大  
地  
萬  
物  
生  
於  
此  
也

卷之三

おもてのまへにあらわすもの  
おもてのまへにあらわすもの

車  
東坡集十二、至陽邑中賦水  
翻ホン、聯クイ、印尾鵝筆ラシ、確カジ

虬骨蛇介蚌翠浪走雲陣  
刺水綠鐵抽箱牙註曰江浙間  
人目水車為龍骨車  
日之田之水之舟之日之水之舟之  
水之舟之水之舟之水之舟之水之

もよして王氏の農書を解く

仁和寺小物ノ御本トテアリテ石馬  
トシテアリタリシテアリトシテアリ  
ウラシムルモノトシテアリトシテアリ  
ウラシムルモノトシテアリトシテアリ  
ウラシムルモノトシテアリトシテアリ  
ウラシムルモノトシテアリトシテアリ

に和寺  
寛平はゆゑの庵をあつまつ

卷之二

自觀音中和列大安寺

此後行教在漢字能八擧す  
時大喜薄厚よりて汝を説よ  
ううて叔もしくて王もと渡  
りんとの事。又教夏ままで辛署  
の事とすらよのりともい  
ふ。もうこの事又秋に秋祭をん  
だ。高祖の事と東南男山鳩  
巣よりすれ行教則奉をして勅はと

とぞ作とひ不ふ勸清き神皇正統紀至事根源元  
見エタリ

しらしろ 佐古しおうう

極樂寺 八幡又護國寺別當安寧山縁起云大安寺舊燈大師位安寧寺上墨右件寺奉爲石清水八幡大菩薩三所君達梵天帝釋天神地祇氣師信父母六親眷屬三有法界有歟無歟皆悉爲令往生極樂淨土以去元慶淵年始所建立也

安宗者行教和尚才子

高良

内高ソラチナス也日本記ヨウジ

天武二年二月八日高良記宣誓田天皇印テモノ農曆武畧之徒將又云鄉補任曰天武内神大臣孝元天皇五世孫也在官二百四十四年春秋二百九十五年但薨年月日人不知之或曰仁德天皇五十八年丁卯薨或云ようく玉高命

四〇一

まことに和音の御節重ねは節より  
りんごとくらぶらとあとかわす  
まきさくよ醉く無しへやううかと  
あううううううううううううう  
なまくまくやまくとまくとまく  
まくまくまくまくまくまくまく  
よ酒を無くつまくまくまくまく  
くくくく後々うんとううよもかく  
まくまく内音しききてうづんとゆ  
のううううううううううううう  
て血をうたむよみくらうううう  
はまうううううううううううう  
血をくくくれとくまくまくまく  
えれへふるふるとくえやくとく  
くうはのうううううううううう  
よくよくのえねとつまくとまく  
くのうちやんみくとくとくとく  
くとくとくとくとくとくとくとく

もくりりやふむすてまくひや  
あしよとんじはくても  
金きくこえにまへゆても  
天おもむか母をれんよもくそ  
をくらうめりもやうともしもく  
かふりあくきのうやくも  
平くれとえれととと命令  
へきくつにんす力ととくり  
くまくともへとまくらふ  
くくとゆくのもくらもく

もくりり耳くるとくげる  
わきくら命令まくとく  
くくらくらくら

わく

鼎くまとくらう和名集

後文曰三足兩耳和五味寶器  
俗よしもくらの教（拾遺）  
ほの圓乃たにへくらうつうの  
りくらへもえくらゆ

もく

奏乃字くらうう草と

ふ

文子と書道家と云ふ  
御代筆と云ふ

文子と書道家と云ふ

文子と書道家と云ふ

文子と書道家と云ふ

辛苦の世

印室より天吹りとぞと云ふ  
さうの出あくさんじう  
神とあくとれちわくのほゆ  
やうのて風流のうりやのゆれ  
はよいのゆれ若風情けやよもく  
め入るの思のゆうりとす

うきよとくらむ比らうひくふ  
うきよとくらむてゆくすもくと  
とくのうそとよくとく  
てもうへうくひくとくとく  
あらひくとくとくとくとく  
じよとくわくれにまとあんと  
あらうじん信くらわうのう  
きよとくわくれのうとくとく  
うきよとくらわうのう

風流のヨリミヤシの如

下廻ノ天使（セイテイ）彼乃トシテ彼子  
カレヒナ飲食ト入ル具ラク和名  
曰様子今俗所謂彼子也（以餉送

かみのへを  
むすめよあう  
咬へまし

傷とし痛とも万葉よし」歌  
氏作「よし」と「よし」の二重  
意象による「圍」字を下へ

あつてやひもとひのとを下る  
きいづらふもとゆうてえほり  
天候へそくはれのゆれあむ  
すこせうわきてるれあむ  
くてもくじゆくやくらうよち  
アヘ前のもりもあ  
くにへそく  
天候へそく  
天候へそく  
天候へそく

和葉とだん 白氏文集・林間煖酒  
焼紅葉石上題詩拂綠苔  
不思ひのて おひひみゆ  
まひひひひひひ  
ひとわくれ  
水と水食へ多  
ノ食とくしり  
宣教寺  
そもひわくらひの多  
そもひわくらひの多

文としよとしよと

楊誠齋詩卷

屋炎蒸不居高天爽氣亦全無  
送他何用可不與庄子曰和無用而  
始可與言用矣地非不廣且大也  
人之可用容足耳然則廁足而  
墊之致黃泉人尚有用乎惠子  
曰無用莊子曰然則無用之為用  
亦明矣

久くわいさざれてくまくまくまく  
くもりてやうへくへくへくへくへ  
えゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑゑ  
わうはうはうはうはうはうはうは  
くうはうはうはうはうはうはうは  
すくへあまくわんとくくうよしとく  
りとくうくうくもくうくうわくよ  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くらもくらもくらもくらもくらもく





蒙古文

學業の仕事も  
アーチーの事より  
もと高められ、後漢書より又藝能  
も樹木石とよびて、もういふを  
居てと云ひや

秀吉は人家とくらむ。 恵遠は呻  
乃のよきより出でて不敵王者不祥文  
母なるとぞこの人のあらう又棄恩

入處爲焉うえ能思者、のぞ一子出  
あら族々天をりて徳文りう

ふへあよむれて

本生心地觀經八

曰心如流水、念、生滅於前後也。不  
暫住故心如大風、一利那、向歷方  
所、故心如猿猴遊立欲樹、故心如  
兔蛾愛燈色、故心如野鹿遊、假  
而故心隨萬境轉、所實能幽。

もとく

もとく

貪欲むり

はれ経諸苦所、曰貪

紙の食

欲爲本焉、滅貪欲無所依此

一萍不すと

事文教叢書集信向

守清禪師如何是和尚取風曰一餅、  
氣、一沐到所是天涯

わきとひつじの

范充丈布衾絡藜

蘿之日綿布之溫名教之樂德殿  
之尊、六鞞鹿裘、寒、布衣、掩形、  
糖梁之飯藜蘿之羹

至まどりのさんへそりくくゆ



そひかわいひたん

まことに方俊郎

せひ、唯以一大事曰縁故出現於

卷一

あはれせじくらむ

孟子、豈有

他外避水火也如冰益深如火益熱

老夫不やうて死んだす

老院本

十九年、悲死経妻子  
珍寶及王位臨命終時不隨者、  
わざわざしてもくじに経さん

もかくまこと

高季閭よ感歎傳わ

やんじくね

おもろうういも

うくのうくのう

こがくちぢりくのう

活供のう

てもおひくのう

かみくのう

もくくくのう

よもくのう

ひくくのう

よひくのう

よもくのう

よひくのう

よもくのう

よひくのう

よもくのう

よひくのう





修業と修業と修業と  
修業と

傳灯子之子也

此非時 佛家の法事一食中日  
中とてへわとくつん或一人でゆ  
ゆきて一食の分飯よしとひもと  
の佛ゆきてゆきよりひもと  
非時の分佛よしとひもと

印産の如くあらまやうのへそ  
まほろばのむらに胞衣をうむる  
対ひまつりのこゝにゆきをも

山彦の時、  
平家に敗

中云后寢也。仰面枕。覩  
とあくもひよわう曾子仰面生  
りへ南へ。皇女さんゆよへ  
少しあはれをへ少しあはれ

和名集曰蔣勑切韻曰覩勝同

和名古

名集曰蔣筋切韻曰韌

勝音

印胞衣 神代卷及至產時先以淡路  
列為胞衣之印胞衣也

うつ木 実元の法

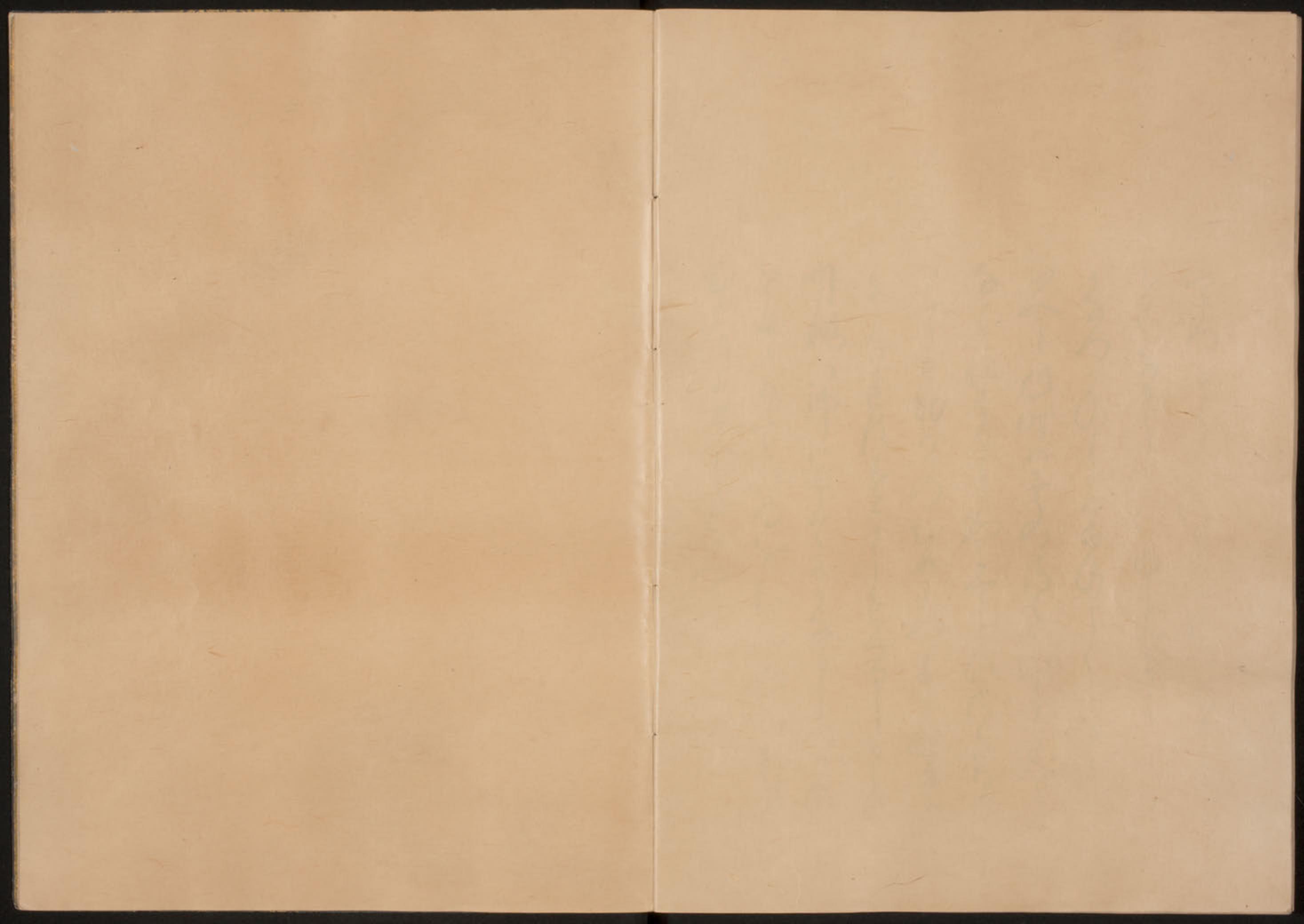
儒書仙去圖繪

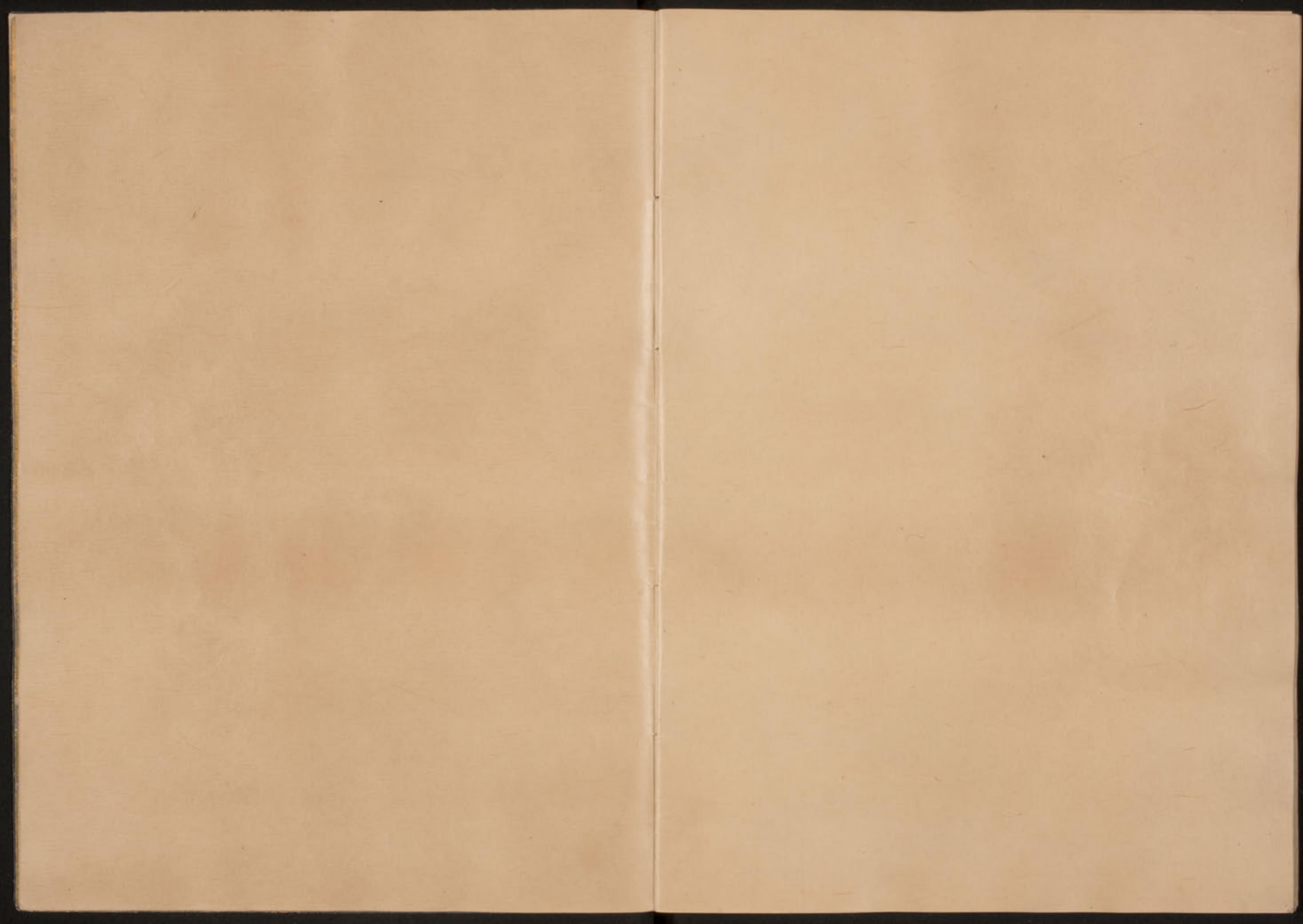
八重のとねりしりと交わるこゝ  
をぬれ交えまと草王院の交わ  
東大寺の歴なるの新

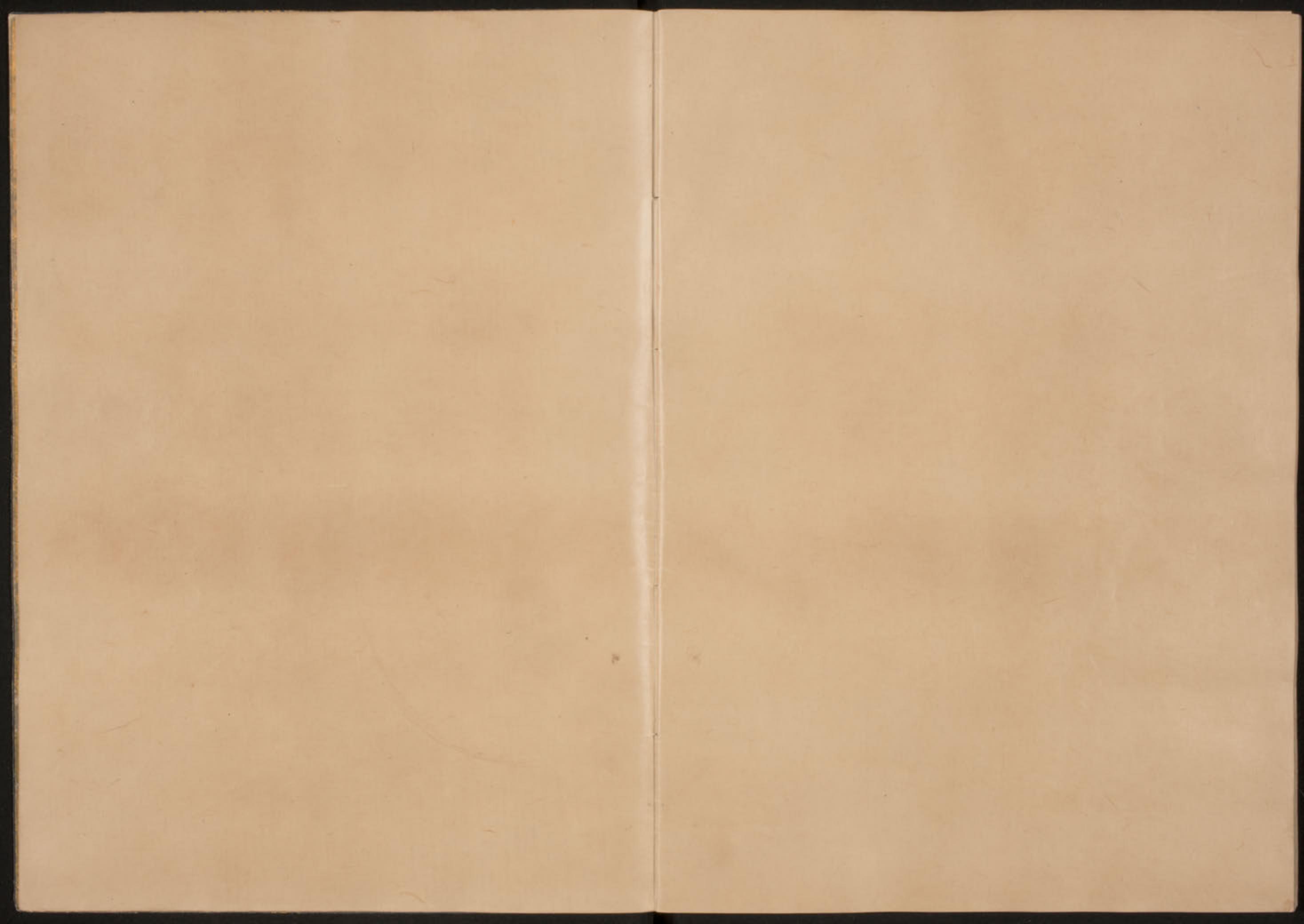
延政元

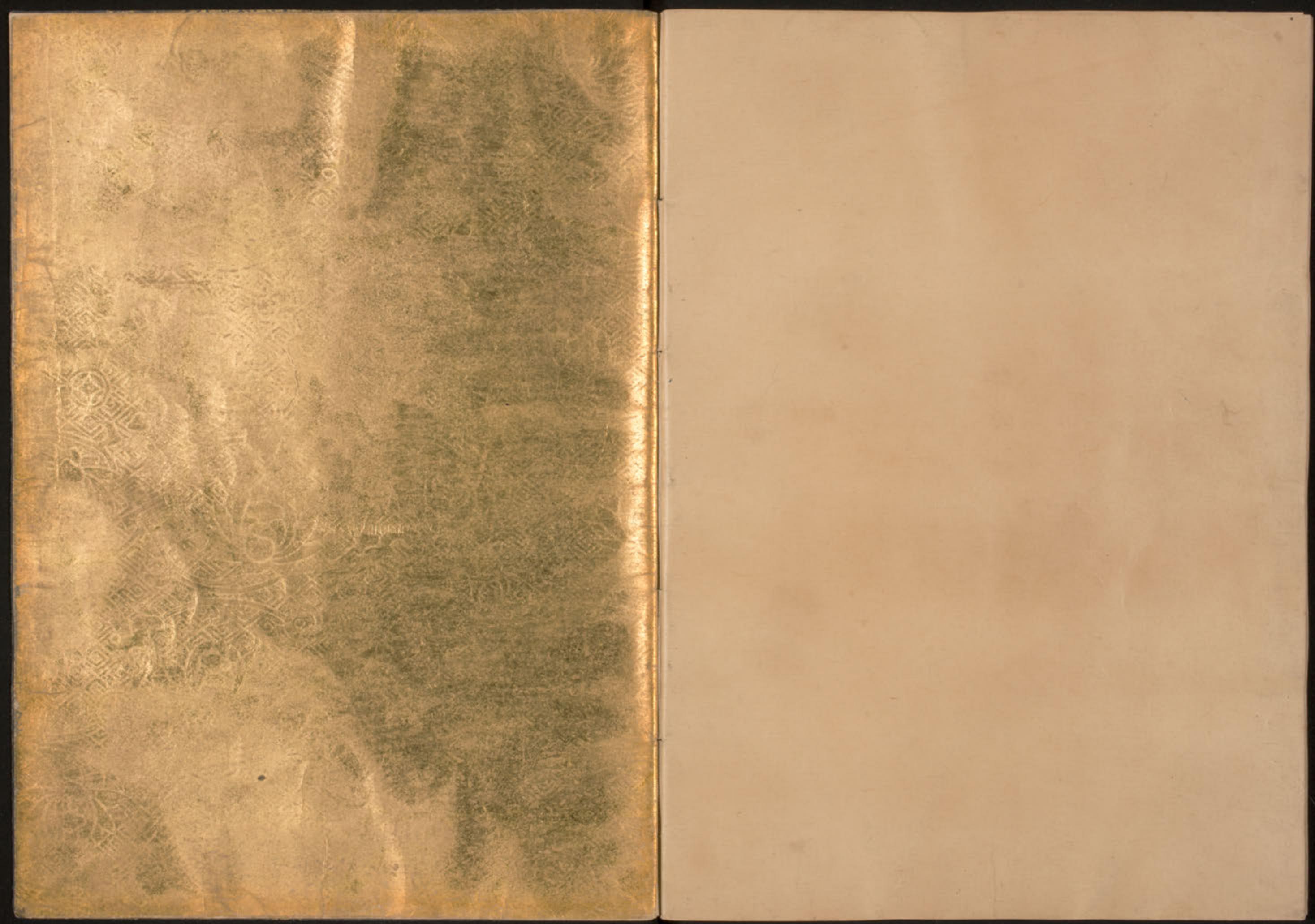
後陽成院の室女











110X  
516  
4

